

# 『枕草子』における虚構性

## — 史実とずれのある章段を例として

孫 莎莎

### はじめに

『枕草子』を読んで、文中に溢れた「華やか」と「笑い」の雰囲気引き付けられた。中宮定子を初め、定子の父道隆、兄弟伊周や隆家などの装束や行動ぶりなどを細かく描いて、行間に賛美的な気持ちをにおわせている。中関白家は受領階級の娘清少納言（以下略して清女と読む）にとって憧れの世界である。しかし、『枕草子』の創立過程からみれば、清女が宮仕えしてからわずか二年後、中関白家は栄華から没落した<sup>1</sup>。だから、必ず清女が書いたように、いつも華やかで、嬉しいとは限られない。中関白家の衰退は主家に可愛がられて、つねに中宮への一体感を求める清女に何の影響を与えないとは言えないだろう。でも、没落の時期に於いても、清少納言は相変わらず主家賛美の物語を続けることに興味が湧いてきた。現実の暗さと作品の明るさの間に屈折と虚構を避けたいと思う。その虚構性はどのよう理解すればいいのか、清女の創作意図はなんだろうか。従来枕草子本文の記述と史実と合わない章段を取り上げて分析する論文が少なくない。例えば、加藤静子氏<sup>2</sup>は史実考証研究の視座から中関白家の歴史的没落期における登場人物の官職のずれや中宮周辺の状況描写の不自然さを指摘していた。以下、すでに証明されてきたいくつかの日記的章段を例としてその虚構性を分析していきたいと思う。

枕草子の内容はだいたい三つの章段に分類される。即ち、日記的章段、随想的章段、類聚的章段。其の中に日記的章段は長保二年（一〇〇〇年）皇后定子が崩御されて後、宮仕えを去った清女が数年の間に執筆した章段である。日記的章段は、作者清女の直接経験した宮仕えの日常が、鮮明に綴られている。しかも、その内容は自己の体験を中心としながらも、主眼とするところのものは、主家中関白家の繁栄と主人定子中宮のめでたさを現して、それを心から賛美することにほかならない。総じて言えば、それらの章段において、清女が自分の体験を記録するように見えるが、その中には歴史の史実から逸脱する章段が多い。清女は歴史の事実に目をつぶって、自分に有利な材料を取って日記的章段を書いたのではあるとは言えるだろう。材料を選択する時には、すでに創作の意味が入っているの

物語りのような嘘話とはいえないが、歴史書のような記録として読むわけではないと思う。一体清女はどのよう虚構を方法として利用しているのか。虚構といえ、いろいろな面がある。例えば、事件の虚構、年次の虚構、言葉の表現の虚構など。本文では、主に日記的章段表現上の問題からその虚構性を探してみたいと思う。さらにそれを通して、清女の執筆意図と立場などはっきりさせてみよう。

日記的章段を読むと、二つの面白い点に気付いた。一つめは、現在の事実ではなくとも、文の時称を現在形にとること。二つめは会話文と語り手が多いこと。以下はこの二つの特徴をめぐって枕草子の虚構性を論じてみよう。

### 一、現在形

過去のことを叙述しているのに、過去形を使わずに、ほとんど現在形で日記を書いているのはおそらく『枕草子』の日記的章段だけではなく、『紫式部日記』や『蜻蛉日記』などにも現在形を使う例がある。ただ、『枕草子』ほどそんなに多くない。それに『枕草子』が独自の表現を持っていると思う。つまりその場面性である。一つの場面においては、登場人物の話しの内容、装束のデザインと色を細かく、いきいきと描いていた。とくに栄華期にそういうようなことが多い。<sup>3</sup>すでに三田村雅子氏<sup>4</sup>が指摘したように「枕草子は現在形を叙述の方法として選択することによって、意味づけを拒み、不安定な形のまま作品を提出していると言うことができよう。（略）枕草子の現在形は出来事の現前を意図しているように見える。」「現在形が、場面的な理想追及の当然胎みこむ事実離れを、事実そのものとして享受させることを要求しているのである。」私はほぼ氏の意見に賛成したい。日記的章段といえども、漢文日記のように当日の出来事をその日に記すのではなく、後日になって、回想的な形式で以前の出来事を記録するのである。だから、清女はわざと現在形を取るの、事実ではないところつまり自分の創作したところを隠すからではないか。実は、清女はその事件の参観者である以上、現在の口調で話すのは不可能だと思う。現在の生中継のように、その場にいないアナウ

ンサーこそ試合の動態を解説できる。むしろ試合に参加しているメンバーはそういうことができない。つまり、現在形の表現は清女の立場から逸脱した。清女の立場から見れば、現在形がありえないのに、それを使って日記のように中宮周辺のことを記録する。

以下具体的な例<sup>5</sup>を分析しながら表現上の現在形を探ってみたい。

第六段は中宮定子が御輿で平生昌宅に行啓された時のことである。定子晩年の不遇悲惨な暗い時期に取材された章段の一つである。先行研究によると、冒頭部に生昌宅の東門を「四足になして」と叙述するが、これは全くの虚構で、清少納言の創作になるものである<sup>6</sup>。史実との矛盾をさて置いて、ここでは現在形の角度からさらにその虚構の方法をはっきりしたいと思う。本文がながいので、ここでは一段だけを引用する。簡単に説明すると、生昌の家の門が狭いので、女房達が乗る車が入られない。だから、下りてから家へ入る。そういう時は殿上人に見られる。そのことについて清女が中宮に報告するところは以下のようなものである。

御前（中宮定子）にまゐりて、ありつるやう啓すれば、（定子）「ここにても人は見るまじうやは。なとかはさしもうち解ける」と笑はせたまふ。（清女）「されど、それは目馴れにてはべれば。よくしたててはべらむにしもこそ驚く人も侍らめ。……」など言ふほどにしも、（生昌）「これまゐらせたまへ」とて、御硯などさし入る。……笑ひて、（生昌）「家のほど、身のほどに合わせて侍るなり」といらふ。……（生昌）と言ふ。……とて、（生昌）いぬ。（中宮）「何事ぞ、生昌がいみじうおぢつる」と問はせたまふ。……（清女）と申して下りたり。（第六段 大進生昌が家に）（＝で表示されるのは現在形で、＿で表示されるのは過去形である。）

この短い章段においては、文の末尾の動詞は七つで、わずかに二つが過去形に変化した。しかし、そのことが全て過去に起こったことで、清女はここでわざわざ現在形で書いて、読者に臨場感を与えた。特に一つ一つの場面によって構成させる。具体的な場面を描くときは現在形を使って、一方そのシーンが閉じると、過去形で述べる。上の段を分けて見ると、二つの場面がある。清女は中宮に報告するところ、生昌が硯を差し入れる。そして、清女と生昌のやり取りという場面である。「いぬ」という過去形をしるしとしてこの場面が終わる。それから、第二の場面に入る。清女と中宮の会話。「下りたり」で文を結ぶ。だから、現在形を多く使ったのは清女の場面性を追求するからだろうか。場面の描写は細かければ細かいほど、虚構性

を見出だす。清女が一つの主題を心がけながら、自分の創造を事実のなかに混ぜ込んだのである。では、その目的とはなにか。

中宮定子については、池田亀鑑は以下のように指摘した、「一事件毎に必ず総括的な意図をもって、中宮の言葉と態度を叙述説明し」。<sup>7</sup>確かに、定子は生昌に同情を寄せたり、擁護したり、女房たちをたしなめる存在として描写されている。つまり、清女は中宮定子の寛容さ、慈悲深さを表現するために、わざと一連の生昌の滑稽さを書いたのではないか。この章段の主題は、主家の賛美賛嘆に設定されていると捉えるべきである。

もう一つの段落を見よう。第七段は翁まろという一匹の犬をめぐる中宮サロンの笑いなどを描いた。先行研究によれば、首謀者伊周の動向は翁まろ章段の展開と驚くほど酷似している。<sup>8</sup>つまり、この段落は表面から見れば、犬の話であるが、裏には伊周のことをほめかすのではないかと推測できるだろう。日記的章段の中に、この段を除いては、動物が登場する段落があまり見られない。それに、犬を人のように描いてきた。例えば、「柳かづらせさせ、桃の花をかざしにさせ、桜腰にさしなどして、ありかせたまひしをり」とか「涙をただ落しに落すに」など。だから、清女はただ犬のことを書いているのではないと思う。

以下、翁まろという犬は帝の好きな猫を脅かすので、打たれて流放されて、また宮中に戻った後の文を見ていきたい。

御鏡うち置きて、「さは、翁まろか」と言ふに、ひれ伏して、いみじう鳴く。御前にもいみじうおぢ笑はせたまふ。右近内侍召して、「かくなむ」と仰せらるれば、笑ひののしるを、上にも聞し召して、わたりおはしましたり。「あさましう、犬なども、かかる心あるものなりけり」と笑はせたまふ。上の女房なども、聞きて、まゐりあつまりて、呼ぶにも、いまぞ立ち動く。……「つひにこれと言ひあらまはしつること」など笑ふに、……と言ふ。

さて、かしこまりゆるされて、もとのやうになりきに。（第七段、上に候ふ御猫は）

上の部分は二つの場面に分けられる。一つは、中宮と清女は翁まろを見る場面。そして、右近はその話を天皇に申した。ここで、この場面が終わった。「たり」をしるしとする。それから、第二の場面に入る。天皇と側の女房たちが翁まろを見る場面。「なりきに」をしるしとして終わる。

以上から分かるように、「現在形」は一つの場面を描く時によく使われている。

もう一つの章段を見よう。この章段は長徳元年（九

九五)に春宮の妃となった淑景舎原子(定子の妹)が、入内後初めて定子を表敬訪問した折のことを描く。この段に描かれた道隆は、猿楽言を次から次へと発し、周囲を笑いの渦に巻き込む明るい洒落な人物として、形象されている。しかし、現実には、昨年十一月頃からの病気(糖尿病とも肝硬変とも言われる)に悩まされ、辞表を出したばかりのころであり、冗談ばかりをいっておられなかった時期である。<sup>9</sup>次の例を見よう。

さて、(中宮)みざり入らせたまひぬれば、……と聞こえごつ人々も(女房)をかし。障子のいと広うあきたれば、いとよく見ゆ。上(関白殿の北の方)は……ただ御衣などぞ見ゆる。淑景舎は北にすこし寄りて、南向きにおはす。……げにめでたくうつくしと見えたまふ。殿は(関白殿)薄色の御直衣……こなた向きにおはします。めでたき御ありさまをうちゑつつ、例のたはぶれ言せさせたまふ。淑景舎の……なほたぐひはいかでかと見えさせたまふ。(百段しげいさ淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など)

ここで中関白家の人々の華やかさとめでたさが細かく描かれた。最初は「入らせたまひぬ」という過去式を使って、それから現在形で表す場面に入る。さて、作者清女のこの段の執筆意図に関しては「ひたすら、その場における情趣、雰囲気をも忠実に描き出して、華やかな中宮周辺のめでたさのみを回想する」ことが強調されると推測できるだろう。やはり主家賛美に帰するだろう。

場面的な理想追及のほか、表現上から現在形の特徴をまとめて見ると、およそ次の二つの特徴が挙げられる。

### 1、敬語の現在形。

敬語の中に一番多いのは「給ふ」と「おはします」。もう一つ注目したいのは「給ふ」と「おはします」が回想表現「き」「し」「しか」などを伴って現われている場合が非常にすくない。補助動詞「給ふ」は敬語化を受け持つものと措定し、ともに公の世間に対する私的な自己の謙遜を現すと説明できる。つまり、清女は常に女房の地位を意識しながら、定子などを絶対的な存在として尊敬する。

### 2、「笑ふ」の現在形。

前にも触れたように、枕草子における「笑ひ」は本当に多い。「笑ふ」はすべて過去の動作であるが、枕草子にはほとんど「笑ふ」の現在形を使っている。清女は時間の経過などを無視して、まるでいま演じているように描いたのはなぜだろう。やはり主家の永遠のめでたさを目指して描こうとするのではないか。つまり、清女のイメージにはただ楽しいことだけが残った。あ

るいは悲しいことも覚えているけれども、主家賛美の主題に合わせるために、素材を選択した。栄華期の段落と没落期の段落の割合からみれば、清女を選択する意図が見られる。だから、清女は自分が憧れた主家世界を賛美するために、ある種の現実の構成が必要だったはずである。構成とは、また虚構化と置き換えられる言葉でもあろう。

それに、『枕草子』における「明るい」時期にかえって「笑ひ」が少なく、「暗い」時期に「笑ひ」が多くなった。それは清女が猿楽好みで、明るいところだけに注目するからだと解釈する可能性がある。でも、やはり「暗い」時期における「笑ふ」という動作自体はある種の屈折があると思う。「笑い」の裏に「悲しみ」が潜んでいるかもしれない。作品に残された史実の痕跡を感じ取り、そこから枕草子の悲哀を積極的に読み取ろうとする研究者も出てきた。例えば、萩谷朴は「悲哀の文学—枕草子の一面」<sup>10</sup>という論文では各章段における悲しみを探り出した。

また、「宮廷文学としての枕草子」<sup>11</sup>によれば、一三三例に及ぶ笑いの記述(笑う、笑むという動詞の頻度数である)中、清女自身の笑いの記述は二十数例にすぎぬという事なのである。即ち、清女は中宮の周辺を中心として「笑い」を作り出す。だから、「笑い」が多いとはいえ、本当に心から発するのではない場合がある。清女は主家の明るさを表現するために、虚構の方法を用いて、「笑い」の場面を作ったのである。

## 二、「語り」の技法—虚構という方法

「現在形」を使って、臨場感を読者に与えているメリットがあるのは論を俟たないが、と同時に語り手の問題も生まれた。つまり、前にも触れたように、語り手はもし第三者の立場に立つなら、自分が目に見え、耳に聞くことを客観的に語ることができる。しかし、清女は中宮サロンで重要な位置を示しているし、事件の主要な参加者として登場する機会が多い。つまり、清女はつねに「聞き手」と「語り手」の間に変換する。

また、日記といえば、普通自分の気持ちに重点をおいて書いたものが多いけれども、『枕草子』においては、内面の描写が非常に少ないといことに注目したい。それに、定子や女房や貴公子などの装束の描写を除いては、叙述的なものも少ない。地の文より会話文は大幅な分量を占めていることもうかがえる。前の第六段の例を見れば、分かるように現在形の「言う」もよく出てくる。会話文の多さも時期によって違うと思う。栄華の時期においては、清女自身の語りが非常に少ないことに気付いた。大体「問」と「答」というような形

式で行う。つまり、この時には清女は中関白家の外に立って、距離を保ちながら第三者の目から定子たちの活動を見るだけである。それに対して、没落の時期においては、清女は活躍し始めた。つねに他者との滑稽な会話を通して、定子の笑いを誘い出すのである。また、よく面白いことを定子に語る。つまり、この時期に至っては、清女は定子との一体感を求めながら、自分を道化者として演じているし、また、「語り手」として定子サロンの盛に力を入れる。実は、没落の時期においては、清女だけではなく、さまざまな「語り手」が登場する。それを利用して、主家讃美の物語を続けるのか。あるいは他人の口を借りて、虚構と言う方法を隠すためなのかもしくは読者を信じさせるためなのか。なぜかという、語り手と聞き手のやりとりが完璧であり、それに問いへの答えの速さにも驚いた。時には二人が会話するのではなく、自問自答の感じがする。即ちすべて清女自身は前もって設定したものである。だから、清女はわざと多くの語り手を登場させているのはかえってその人の身分とか、関係とかに相応しくないと現れてきた。そこから見ると、語り手はすでに虚構の方法を使っていると言っても差し支えないだろう。

例えば、中宮を語り手として登場させる段落がある。「清涼殿の丑寅の隅」（二〇段）と「殿などのおはしまさでの後」（百三八段）である。中宮ほどの人が長々とこのような話をする自体いかにもおかしいと思われる。つまり、その語り手は中宮の身分に相応しくない。でも、それは事実であるかどうかを判断するのも難しい。なぜ中宮の口を借りてこの話を記すのかという問題から見当をつけたほうがいい。

また、「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」（七八段）は語り手が多いので、注目されつつある。簡単に紹介すると、斉信から「蘭省花時錦帳下」<sup>12</sup>の下の句を問う。清女「草の庵をたれかたづねん」という答えを返す。この話は宿直所の男達の間に言いふらす。そして、宣方と則光の二人は清女の知らない事情を語って聞かせる。この話は天皇まで伝えた。従来この段落を自讃段として扱われてきた。清女は自分の才知を見せびかすために、其の話しを作るのだと考えられる。実際起こったことではないかもしれない。それに、三田村雅子氏<sup>13</sup>によれば、この点に関する限り、非合理的な虚構とは見られないことにしても、ここに述べた、清女の知らない事実をいかに自己のものとして話の中へ汲み入れるか、という話法の問題として関連するものと思われる。いずれにせよ、これらの例は聞き手の位置にあって清女が、作者として筆を執った時、

次の聞き手＝読者に対して、全てを知悉している語り手として、話術＝語りの技法（虚構、省略）を使用していたのである。

「語り手」の身分から大雑把に分類すれば、三種類に分けられる。①清女。語る対象は定子を中心とする。②貴公子たち、道長側の人が多い。例えば、行成、則光、生昌。ここで面白いのは彼らの語る内容は清女への賛美の言葉が多い。それは清女の自讃談にも関わる。清女自讃談と言えば、さらに虚構的な要素を避けがたい。③ほかの女房たち。天皇と定子を対象として語る。紙面の関係で、具体的な例を取り上げる余裕がない。

総じて言えば、語り手の問題は虚構性を解明する手がかりとして非常に重要である。今後は語った内容と語り手の位置から清女の創作意図と方法を検討する必要があると思う。

## おわりに

清女は跋文で自分が目に見え、心に思うことをそのまま記録するというふうにした、即ち伝承でも虚構でもない、すべて、経験の記述であり、事実の記録である。しかし、実は所々において清女は虚構を方法として創作する意図が潜在しているのではないか。また、清女は常に読者の存在を意識する。これも虚構性に関わると思う。今後の課題としてさらに研究したいと思う。それから、石田穰二氏<sup>14</sup>は「宮廷文化の記録」として、それ以外の何物も期待すべきではないという読みが提示される。また、清女は「語り部」として中関白の繁栄を語る文学という視点から日記的章段を評価する説がある。私の考えには、清女が史官のように天皇や皇太子などの日常の起居振る舞いを克明に記録したのではなく、自分が憧れる主家世界を作るために、記事を選択したり、史実と矛盾する話を作ったりする。日記的章段にわたっては、つねに虚構の方法が読み取られる。今後は平安時代の日記作品の虚構性に較べながら、さらに枕草子における虚構性の独自性を究明したいと思う。

## 注

1. 正暦四年（993）の春、秋いづれか清少納言は中宮定子へ宮仕え。長徳元年（995）四月、関白道隆死去、中関白家は栄華から没落へと衰退した。
2. 加藤静子 『『枕草子』日記的章段の一考証』『平安文学研究』 1980年7月
3. 田畑千恵氏子の論によれば、後期章段の「叙述性」に対して前期章段の特徴を「場面性」に見出す。『枕草子「かへる

- 年の二月二十余日」の段の位相」(『国文学研究』第 80 集 1983 年 6 月)において指摘されたある。本論では、後期章段にも場面性があり、それにもとづいて現在形を論じようと思う。
4. 三田村雅子『枕草子 表現の論理』 有精堂出版株式会社 1995 年 2 月 P37
5. 枕草子本文は三巻本によるものとし、引用及び段数は新編日本古典文学全集『枕草子』を参考する。
6. 浜口俊裕 「『枕草子』回想章段におけるデフォルメー大進生昌が家にこの章段—」(日本文学研究 1984 年 1 月) また『小右記』十日の条によると、「件の宅板門屋、人々云ふ、まだ御輿の板門屋に出入りするを聞かずと」
7. 池田亀鑑 『全講枕草子 上』 至文堂 1956 年
8. 『枕草子事典』(枕草子研究会 勉誠出版 2002 年 4 月) による。
9. 長徳元年 (995) 1 月、一条天皇、東三条院に行幸。関白道隆所労により参内せず。関白道隆、病のため叙位にあたり簾中に候する。(昨年十一月頃より病)。2 月、関白道隆、辞表を奉る。中宮定子、妹春宮女御原子と登花殿で体面する時、関白道隆再度辞表を奉る。
10. 萩谷朴 「悲哀の文学—枕草子の一面—」『国語国文』昭和四〇年一〇月で次のように述べた。「枕草子の中に、皇后乃至中関白家の衰運に対する哀傷を全く残していないとは云い切れない」三田村雅子「枕草子の〈笑ひ〉と〈語り〉」『枕草子 表現と構造』に収録される。P105
11. 野村精一「宮廷文学としての枕草子」『枕草子 表現と構造』に収録される。P 12
12. 『白氏文集』の「盧山ノ草堂ニ夜雨独宿シテ…」と題する詩句による。「蘭省ノ花ノ時錦帳ノ下。盧山ノ雨ノ夜草庵ノ中」
13. 三田村雅子「枕草子の〈笑ひ〉と〈語り〉」『枕草子 表現と構造』に収録される。P105
14. 石田穰二 「枕草子」『日本文学講座』 中古 1 三省堂 1967 年 12 月

そん ささ／北京日本学研究中心 センター 修士課程 2 年